

あかしん

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ <http://www.akai-shinbunten.net> <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861

各種地図調整・印刷/地理情報システム
立体地図・地図模型・地図パネル・地図掛け軸
オンデマンドデジタル印刷・大判ポスター出力



株式会社 **アルプス** 出版社

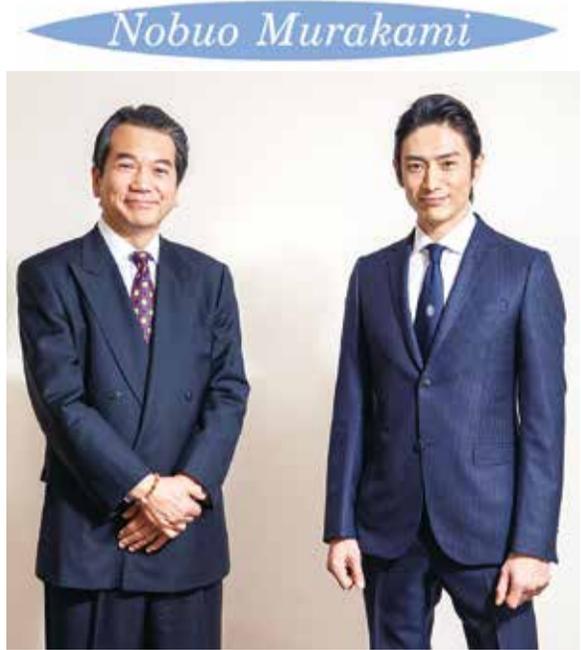
〒461-0004 名古屋市東区葵一丁目15番18号
オフィスサンゴヤ 6F

TEL.052-931-1009 FAX.052-932-1312
<http://www.alpspublishing.co.jp/>

企画・制作：株式会社 新聞ビル

元氣のでてくる“ことばたち”

197



撮影・小尾淳介

村上信夫

■村上信夫プロフィール

2001年から11年に渡り、『ラジオビタミン』や『鎌田實いのちの対話』など、NHKラジオの「声」として活躍。現在は、全国を回り「嬉しい言葉の種まき」をしながら、文化放送「日曜はがんばらない」(毎週日曜10:00~)、月刊『清流』連載対談〜ときめきトークなどで、新たな境地を開いている。各地で『ことば磨き塾』主宰。1953年、京都生まれ。元NHKエグゼクティブアナウンサー。これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。著書に『嬉しいことばの種まき』『ことばのビタミン』(近代文藝社)『ラジオが好き!』(海竜社)など。趣味、将棋(二段)。
<http://murakaminobuo.com>

た会社「リバースプロジェクト」も、松陰と同じ想いで運営している。「人類が地球に生き残ること」「未来の子孫に責任を持つて、社会を引き渡すこと」が企業理念である。建築廃材を再利用し

分の命を使おうと考えている。そういう考えを持ったのは、27歳のときから明確だ。念願だった初の映画監督作品「カクト」を撮った直後、自分の夢はかなったが、それは本目的ではないと思いついた。一人の人間として、生きる目的は何かと考え、「宇宙人」の目線で考えてみたという。「宇宙人が地球の人間を見たとき、自然

なくてと思った。そういう信念に基づいた取り組みの数々は社会事業のように見えるが、株式会社である以上は儲けも必要だ。社会還元のためにやっていることで、自分たちの利益を出すという矛盾はないか聞いてみた。「ないですね」と即答。「NPOなどにしてしまおうと自活できません。僕らは社会のためになる仕事しかできませんが、その大義の上でお金を稼ぎ、お金を世の中まわしていただくという考えでやっています。それが本来の会社のあるべき姿。いまはお金を儲けさえすればいいという会社が多くて、お金の志が乗っかっていないから資本主義経済がおかしくなってきたんです」。

生と「人間の生き方」をテーマに議論の場を設けるなど、いま、伊勢谷さんの頭の中で構想が膨らんでいる。究極の目的は、「人が持つ善の力の最大化」を図ることだ。松陰先生の「人間の本性は善である」という言葉にも通じるものがあるのかと思いきや、ちよつと違うようだ。「人間の本性は本能にあると考えています。人間の本性の中にあるのは生存本能で、まずは生き残ることなんです。そこに善悪はありません。そもそも何が善で何が悪かはそれぞれの視点によって違ってくるので、善悪の判断は難しい。人類が生き残るためにポジティブなことをしようと考えたとき、初めて善という考えが生まれてくるのだと思います」。伊勢谷さんの考え方を多くの人にわかってもらうためには、けっこう時間がかかるかもしれない。「松陰先生もみんなに変な奴と思われても説き続けた方です。彼の『諸君、狂いたまえ』という言葉の通り、社会を変えようとする人は狂っているくらいでないとできませんからね」

挫折禁止

「俳優 伊勢谷友介さん」

とにかく饒舌だった。とめどなく自分の想いが溢れ、ことばのよどみがない。熱く語るうち、自分で何を話していたかわからなくなる場面が何回もあった。伊勢谷友介さんが話しているのか、松陰先生が話しているのか、区別がつかないほどだった。目が澄んで、キラキラしていた。男のボクも惚れ惚れした。魂と魂が交じり合う、嬉しい時間だった。

まるで松陰

1976年、東京都生まれ。俳優であり、映画監督でもあり、株式会社リバースプロジェクトの代表でもある。東京藝術大学在学中に、映画『ワンダフルライフ』で俳優デビューした。映画『カクト』『セイジ―陸の魚―』を監督し、映画『あしたのジョー』『ザ・テノール 真実の物語』、NHKドラマ『白洲次郎』『龍馬伝』などの演技は、どれもこれもインパクトを与えてきた。

そして、いまはNHK大河ドラマ『花燃ゆ』で、吉田松陰を好演している。伊勢谷さんは、吉田松陰には、以前から共感を抱いていた。未来を見据えた上で、今をどう生きるべきか明確化して伝えた人だからだ。伊勢谷さんが、2009年に、立ちあげ

た家具、オーガニックコットンのリメイクデニム、エアバッグ再利用の小物、減農薬無農薬の米作り…衣食住に、様々なビジネス展開をしている。伊勢谷さんは考える。今の地球の現状を知って、動かないのは許せない。社会と関わらないと、価値はない。種としての人類が成長しないと、人類と地球の均衡は保てない。

宇宙を含むすべての世界は「摂理」の中にある。摂理の一部と認識し、大いなる循環と向き合い、個人個人が種全体を考える目的や理想を持つて、生き残れる未来を創造出来るはずだと信じる。その未来のために何が出来るか考えるのが、自分の「志事(しごと)」だと認識している。「社会の中の自分」という視点を持つて、自分が出来ることを一生懸命追求していくことが大事と考えている。まるで吉田松陰だ。

伊勢谷さんは、未来の人のために、自



俳画/イネ・セイミ

を壊し、資源を使い果たし、自分たちで自分たちの首を絞めている愚かな生き物かと思えないんじゃないかと想像した。「だが、人間が愚かな生物となってしまうのは、僕一人だけの人間が、人類全体のことを考えて行動していけば、人間の進化につながるはずだ」と考えた。このままではダメだという思いが、リバースプロジェクトに結び付く。人類が地球に生き残るためには、まず限りある資源を循環させることから始め

「自分がつらくても、自分よりもっとつらい思いをしている人を鼓舞していると、誰よりも自分が元気になりますからね。たぶんそれが僕の原点かな。人のため、社会のためと利他のことばかり考えていると、結果的にいいことが自分に返ってくるんですよ」。

伊勢谷版「松下村塾」

大河の撮影も、まもなく終わるが、近い将来、伊勢谷版「松下村塾」を立ち上げる構想がある。地域に必要な社会起業家の育成、志を持った社員の育成、全国の学



好評発売中



イネ・セイミプロフィール

フルート奏者として活躍中。俳優家。絵画を幼より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

俳画教室開講中

常滑屋
とき 俳画教室月二回 午後一時~三時
会費 一回 二、二五〇円(三ヶ月分前納制)
問合せ ☎〇五六九(三三)〇四七〇

インディアンフルート教室開講しています

誰でも簡単に音が出せる楽器です。あなただけ今日からインディアンフルート教室を開講しています。何か始めたいと思ってるあなたへ、数年後、素敵にフルートを奏でる姿がそこにあります。楽しく個人レッスン致します。

入会受付中!!

講師 イネ・セイミ
(日本インディアンフルートサークル協会ディレクター)
レッスン・30分3,500円 会場・半田市柳ヶ丘
申込み 0569-89-7127
お問合せ seimi@oasis.ocn.ne.jp

新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』 就職

—自分ドラマつくろう— (47) 岡田 清治

姪の就職2

「もうすぐつくよ」

「速いですね」

「そうだね、名鉄の常滑駅もここから歩いて五分ぐらいだよ」

「そうですか」

真三はクルマを陶磁器会館の駐車場に停めて、やきもの散歩道の案内板を見一周することにした。

知多半島で真っ先に出てくる名所は常滑焼の「やきもの散歩道」である。陶磁器会館を起点にAコース、Bコースとやきもの散歩道が整備され、案内標識を追って行けば、元のところに戻れる。Aコースだけでもゆつくり歩くと一時間はかかる。

真三はある日、小路で知り合った初老の男から聞いた話を思い出していた。

「生活道路としては不便でした。雪の降る日もあって、本当に大変でした」

「そうですか」

「昔は新聞配達もカブが使えない狭い道路だったので、すべて歩いて新聞配達をしました」と当時、アルバイトした経験を思い出すように話した。

「いまは整備されていますね」

「観光客のためですよ」

舞は足を止めた。遠くを見ている。

「あそこに大きな招きネコが見えるだろう」

「車道の上ですね。すごく大きいですね。ご利益も大きそうですよ」

「招きネコには右手と左手で二種類があるのだよ」

「そうですか。知らなかったです」

「左手は人、右手はおカネ、また白ネコは福、黒猫は病の予防の願掛けをするのだよ」

「面白いですね」

「舞さんはどちらのネコがほしい」

「ええっと、左と右」

「二鬼追う者は一鬼も得ずというだろう」

「そうか」

「叔父さんはどちらでもいいと思ってる。人を招ければ幸福を感じることができる。どのよう小さなことでも人は満足できるものだ。逆におカネをいくら持ってても決して満足できない。おカネをいかに社会や人に役立てるかによってはじめて幸福が得られる。だからどちらを求めるかは大きな問題ではないと思ってる」

「そうか。私は叔父さんのようにおカネ儲けはできないので、左の招きネコを買いいます」

「まいったな」

「ところで神社とかお寺でお参りすることがあるだろう。舞さんは何を祈りするの？」

「えーと、いまは就職できますようにと」

「それではダメです」

「そうですか」

「まず、自分のことではなく、世界のこと、あるいは日本のこと、そして親族や家族のこと、最後にちよつとだけ、自分のことを願うのです。そうし

ないと神様は願いを聞いてくれないのです」
「なるほどですね。世界に目を見開いてお祈いすることですね。わかります。みんながそういう気持ちになれば、世界は平和になるわけですね」
「話が飛ぶが、弘法大師・空海というお坊さんがいたのは知っているね」
「高野山を開祖した僧侶でしょう」



写真：香嵐溪(著者撮影)

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を左記のFAXかメールでお寄せください。
今回は「就職」「日本のゆくえ」「結婚」「夫婦」「インド」「愛知県」についてです。物語が進行する中で織り込むことを試み、一緒に考えます。
FAX：0569-347971
メール：takamitsu@akai-shinbun.net



プロフィール

著者・岡田清治おかせいじ
一九四二年生まれ ジャーナリスト
(編集プロダクションNET108代表)
著書に『高野山開創二百年いっばんさん行状記』『心の遺言』などは社員の全能を引き出せますか！『リヨンで見た虹』など多数

「その通り。空海が万人の幸せを願って入定されるときの誓願した言葉があります」

「そうですか」

「それは、虚空尽き 衆生尽き 涅槃尽きなば 我が願いも尽きなん」と、万人の幸せを願った言葉です。あれだけ偉い修行僧が願ってもなかなか平穏な世界は訪れないのです。やはり世界中の人がその願わないとダメだね」

「わたしもこれからは自分のことより、まず世界の平和をお祈りします」

「そうしたら自分の願いもかなえてもらえるかもしれないね」

二人は上天の坂から歩いていった。天気は晴れ、道で出会う人もいない。静かな小路で土管の上でネコが寝そべっていた。

「黒板塀の工場が並んでいるだろう」

「情緒がありますね」

「ここはかつて土管工場だったところだが、いまは茶器などをつくっている」

「土管、はじめて見ます」

「土管坂や登り窯は重要有形文化財に認定されている」

「いつごろつくられたのですか」

「明治の初期、それまでの伝統技術を改良して土管づくりに成功したのが始まりだと聞きました。これが上下水道などに大量に使われたのです」

「あそこが変わったたくさんさんの穴が開いた土管とは違う焼き物がありますね」

「あれね。あれは電線管というものです」

「難しそうですね」

「あまり聞きなれないかも知れないね。これは地下埋設のケーブルを保護するものさそうです。いまでもつくられています」

「電話線などですか」

「そうです」

「土管坂を歩くと、土管を道路に埋めていたり、石塀のように土管塀に使ったりしているが、常滑らしい小路になっている」

「そうですね。こんな小路は見たことがありません」

知多地方では醸造が発達した。醸造用の壺を常滑の焼き物でつくったが、今はステンレスに置き代わっている。隣の半田市のミツカンは全国的に有名だが、江戸時代、小樽のような半田運河が自然運河として発達。そこにミツカンの本社がある。その

帯はミツカンの黒板の工場建物などが立ち並び写真スポットにもなっている。博物館「酔の里」があって酔の歴史を学ぶこともできる。真三はファミレスをやめてから、写真を趣味にしているのでよく足を運んでいる。

「常滑から半田までクルマで二〇分だから、ミツカンの本社や『酔の里』にも寄ろう」

「はい」

常滑焼、とくに古常滑焼は登り窯で焼いていた

が、石炭、マキ、重油そして今はほとんどが電気窯に代わっている。マキや石炭で焼いていたころに煤で黒くなった家も多く、街全体が黒ずんで見える。今の時代にはそれがエレガントに思えるが、「滋賀・長浜の黒壁のように街づくりに徹底したところがな」と、中途半端な街づくりを嘆く人も少なくない。常滑焼は土管、瓶から急須に移っている。備前焼と同系のようなだが、備前は工房が直接、売る工夫をしているが、常滑は卸業者が工房から仕入れて売っている。

陶芸家のM氏(当時六〇歳)の工房を訪ねたことがある。しもた家風の築五〇年以上の平屋で、その一角の工房でろくろを据え粘土をのせて作業をしていた。狭い通路に作品や壊れたかけら、粘土を入れた壺が所狭しと並んでいる。九〇歳近い母親も顔をのぞかせた。

「今日は暑いね。私は他所から嫁入りしたので苦労したね」

「お母さんが声をかける。」

「常滑は古窯の一つで歴史があつてモノづくりの街です。隣の半田市は商売人の街で機を見て敏なところは、とても常滑の職人の街はかかないません。勝負になりません」とM氏は自嘲気味に話す。

M氏は十五歳からこの職人の道に入った。この年まで続いているのは好きだったというか、それしか知らなかったからだと思います」

狭い工房でろくろを回しながら土と格闘している時は無心になれると語る。

「今の常滑焼の目玉は急須ですが、若い人は急須を知らない人も多く、知っていても洗うのが面倒なので、ペットボトルのお茶を重宝しているのです」

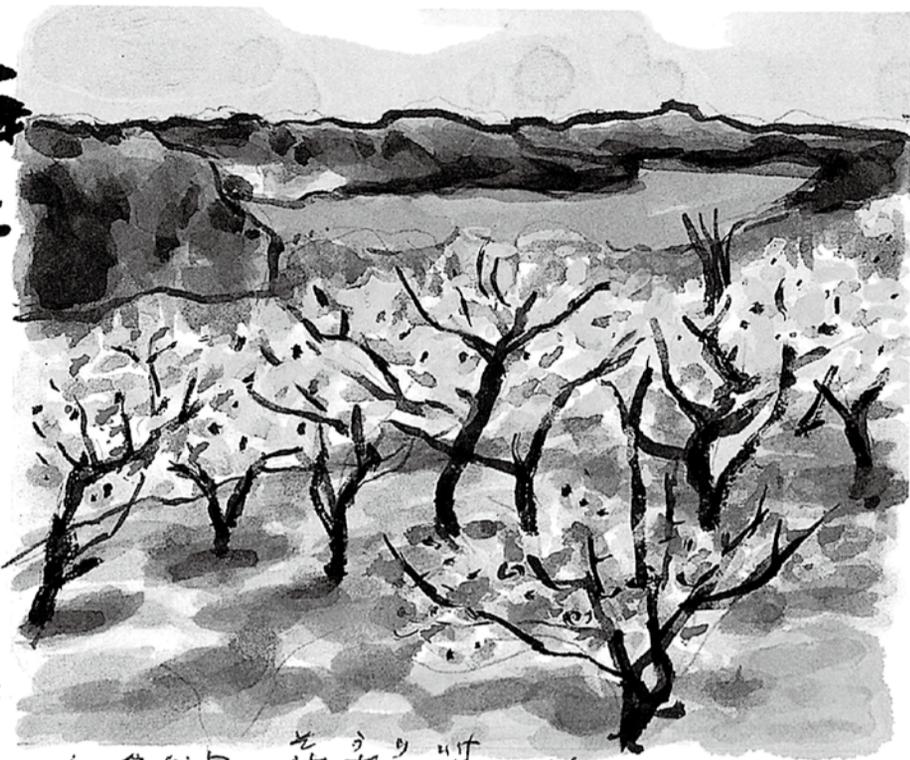
「現代煎茶具展」に一九七八年以来、出品している。一九八七年には日本煎茶芸展で入選(四回)も果たしている。

地元の小学校で急須を使ったお茶の本格的な入れ方も指導している。M氏が湯の温度を確認しながら入れる。それを見ながらお客は談じる。頃合いを見て、二番茶、そして五番茶まで繰り返す。これでコップ一杯分の分量になる。実際に体験すると、お茶飲みが楽しくなる。そうなる、立派な茶器を求めたくなる。お茶の道も深いものがある。この様式でお客を接待すると、効能は上がるように思えるのが不思議である。

真三はやや緊張しながら小さなお皿のような器で一番茶から静かに飲んだ。

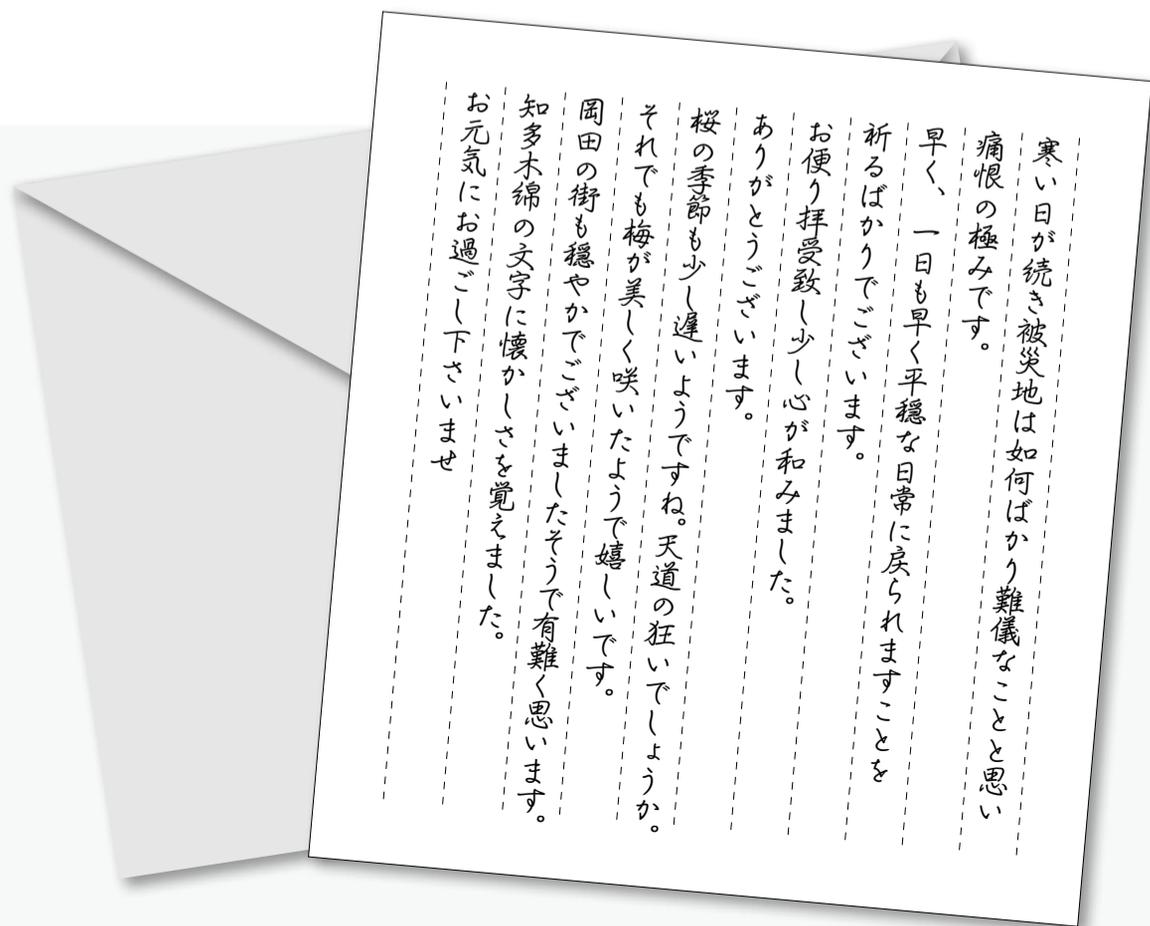
いま、舞と歩きながら思い出していた。

梅林の
景色に見惚れ
一休み



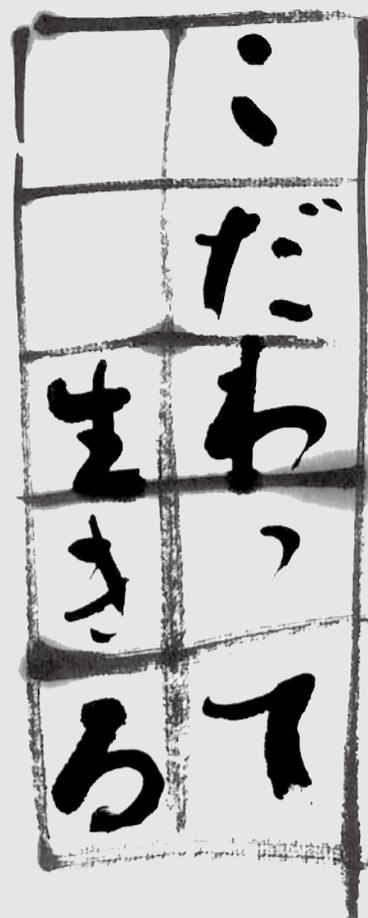
知多半島・佐布里池の梅まつり

春とは名ばかりで、まだまだ肌寒
さを感じます。都々逸に「梅は咲い
たが桜はまだか」と口ずかす
今日の頃です。二月初旬に
知多半島の佐布里池の梅祭りには
行きました。佐布里池は愛知甲水の
調整池で、周には豊かな梅林があり
春には四千六百本の梅が美しい花を
咲かせ、家族や慰労会の人々で
大賑わいでした。直ぐ近くにある
知多木綿発祥の地、岡田の古い
街並に立ち寄りました。ゆるやかな
坂道は土蔵や黒壁の街並など
貴重な伝統文化と歴史があります。



寒い日が続き被災地は如何ばかり難儀なことと思
痛恨の極みです。
早く、一日も早く平穏な日常に戻られますことを
祈るばかりでございます。
お便り拝受致し少し心が和みました。
ありがとうございます。
桜の季節も少し違いようですね。天道の狂いでしょうか。
それでも梅が美しく咲いたようで嬉しいです。
岡田の街も穏やかでございます。ありがとうございました。
知多木綿の文字に懐かしさを覚えました。
お元氣にお過ごし下さいませ

絵手紙集



絵文 縦山善久

返文 小林玲子

縦山善久

昭和十一年碧南市で生まれる。
丸栄陶業株式会社代表取締役。
碧南商工会議所会頭。
愛知県陶器瓦工業組合理事長。
全国陶器瓦工業組合連合会理事長などを歴任。
平成十三年藍綬褒章受賞。
平成二十二年旭日小授章受賞。
丸栄陶業株式会社取締役会長 現在に至る。
京都造形芸術大学・通信教育部芸術学部美術科
洋画コース四年次在学中。

小林玲子

碧南市に育つ。
西尾市在住
共著「西尾の民話」
童話「サケの子ピッチ」
随筆「海辺のそよ風」
(中経コミック「閑人帳」より)
ミュージカル脚本
「みぐりちゃんのおうち」ほか

